

久しぶりにアジアの映画を立てつづけて見る

為我井 輝忠

2月から4月にかけてアジアの国々の映画(むしろアジアを舞台にした映画とでも)を何本も見られる機会を得た。中国、台湾、パキスタン、アメリカ、日本の5か国の映画である。どれも素晴らしく感動的であったが、一般的にあまり知られていない作品ばかりなので、若干紹介してみたいと思う。興味を持っていただければ幸甚の至りである。

今回見た作品は次の通りである。

- 1.『スプリング・フィーバー(原題:春風沈酔的晚上)』(中国、2009年制作)
- 2.『^{クーリンチェ}牯嶺街少年殺人事件』(台湾、2007年)
- 3.『娘よ』(パキスタン映画、2014年)
- 4.『ヨーヨー・マと旅するシルクロード』(アメリカ、2015年)
- 5.『ベトナムの風に吹かれて』(日本、2015年)

『スプリング・フィーバー』は何と言っても圧巻であった。中国本土では上映禁止になり、今回のこの日本での上映会のみで(3月13日)、本国ではまだ見ることが出来ない作品だそうである。監督は梅峰(メイ・フォン)で、今回、日本での上映は新百合ヶ丘にある川崎市アートセンター アルテリオ映像館にて、日本映画大学の主催で1回のみの上映であった。監督自身も出席し、上映後対談会が開かれた。

ストーリーは南京を舞台に、夫ワン・ピンの浮気

を疑う妻リン・ジュエ、彼女が調査を依頼した探偵、探偵の恋人リー・ジン、そして調査で浮上した夫の浮気相手の青年ジャン・チェンが登場する。男女5人が性別を越えて複雑に絡み合い、狂おしい愛の諸相が展開していく。この作品は、正に中国の同性愛を描いた作品と言ってよいだろう。

『天安門の恋人たち』(2006年)で物議を醸し、当局から5年の活動禁止処分を受けた梅監督が家庭用デジタルカメラでゲリラ的に撮影を敢行した。2009年のカンヌ映画祭コンペティションで初上映されて、脚本賞に輝いた。

『^{クーリンチェ}牯嶺街少年殺人事件』は亡きエドワード・ヤン監督が1991年に発表した台湾映画で、上映時間が3時間56分に及び、BBCが1995年に選出した「21世紀に残したい映画100本」に台湾映画として唯一選ばれた作品である。彼は若くして亡くなったが、今年は生誕70年、没後10年と言うことで新たに4Kレストア・デジタルリマスター版で蘇った。正に、私にとっては『非情城市』と共に忘れられない映画である。

物語は1960年代初頭の台北。夜間高校に通う^{ジャオスー}小四は不良グループ“小公園”に属する少年たちといつもつるんでいた。小四はある日、^{ジャオミン}小明という少女と知り合い、淡い恋心を抱く。しかし、彼女は小公園のボス、ハニーの女で、ハニーは対立するグループのボスと彼女を奪い合い、相手を殺して姿を消していた。ハニー



▲今回紹介した映画のポスター。左から紹介順

が突然戻ってきたことからグループの対立は激しさを増し、小四たちを巻き込んでいく。最後は悲劇的な結末となるが、詳しくは省きたい。

この映画に小四として主演したチャン・チェン(張震)とプロデューサーのユ・ウェイエン(余為彦)が舞台挨拶された。チャン・チュンはこの作品でデビューをし、それから28年を経て今やアジアを代表する大スターとなっている。

『娘よ』は女流監督アフィア・ナザニエルが2014年に制作した作品で、私にとっては初めて見たパキスタン映画である。岩波ホールでの上映は4月28日までであるが、「シネマ ジャック&ベティ」(横浜市)(5月20日/土〜)で上映の他、アルテリオ映像館(新百合ヶ丘北口5分)でも上映検討中とのことである。興味のある方はご覧になってみては如何でしょう。

パキスタンとインド、中国の国境にそびえたつカラコルム山脈の麓には多くの部族がひしめき合っている。そのうちの一つの部族に属する、若く美しい母の生き甲斐は、10歳になる娘のザイナブと過ごす時間だった。しかし、部族間のトラブル解決のために、サイナブと相手部族の60歳にもなる長老との結婚が決められてしまう。母親が一番恐れていたことが現実となった。これで娘の人生は終わってしまう。自分が15歳の時に経験したように・・・決して抗うことが出来ない鉄の掟。掟に背く者には死があるのみである。しかし、意を決した母親は結婚式当日、娘を連れて部族を離脱した。一方、体面と誇りを傷つけられた両部族は協力して2人を追跡し始める。彼らは無事に逃げることが出来たか。

見終えて、この国の今も変わらぬ現実とそれを敢えて映画に取り上げた監督の女性ならではの視点に感銘を受けた。ナサニエル監督はこれがデビュー作で、今後の活躍を期待したい。



『スプリング・フィーバー』監督の梅峰氏。2017年3月、新百合ヶ丘「アルテリオ映像館」にて。(筆者撮影)

『ヨーヨー・マと旅するシルクロード』は、世界的に著名なチェロ奏者のヨーヨー・マが50名にも及ぶ音楽家を引き連れてシルクロードを旅し、各地で演奏会を敢行した記録である。

ヨーヨー・マが2000年に「音の文化遺産」を世界に発信するために立ち上げた“シルクロード・アンサンブル”は国際的音楽集団であった。スペイン、ローマ、トルコ、イラン、シリア、ウズベキスタン、トルファン、西安等々、シルクロードにゆかりの

ある様々な音楽家たちと共に彼は地図上の国境をなくした音楽を演奏し続けて行くというのがストーリーである。監督はモーガン・ネヴィルで、彼は多くのミュージシャンのドキュメンタリーを制作してきたことで知られている。

『ベトナムの風に引かれて』は正に楽しく、おもしろく見る事が出来た映画である。

監督は『津軽百年食堂』の大森一樹(私には初めて名前を知る監督である)である。松坂慶子が演じる女性はベトナムのハノイで日本語教師をし、現地の人々との交流や認知症になりかけた母親を現地で世話をしながらたくましく生きていくという物語である。

この映画は劇場一般公開で見たのではなく、私が住む町田の自主上映会で見たのであるが、その時に母親役を演じた草村礼子が参加され、上映後に対談をするという時間が設けられた。初めて女優としての彼女の飾らない人柄や彼女の母親が町田にいて病院で働いていたという話を聞いて、大いに興味を覚えた。思うに、彼女は応援したくなるような女優である。

映画は楽しくも、ただ娯楽として存在するものではない。教えられることも学ぶべきこともたくさんある。これからもアジア映画を中心に優れた作品を見てみたいと思う。